嚴嵩父子とその周邊

——王世貞、『金瓶梅』その他——

大木　康

はじめに
一　嚴氏籍沒の宋版書籍——發端として
二　王世貞筆下の嚴氏父子
三　嚴氏父子と王世貞
四　嚴嵩批判の文學作品
五　『金瓶梅』と『天水氷山錄』
結び

はじめに

嚴嵩（一四八〇～一五六七）は、明代嘉靖年間の後半二十年あまりにわたって時の宰相である內閣大學士の任にあり、息子の嚴世蕃とともに朝政を專斷し、絕大な權力をふるった人物である。(1) だが最後に嚴世蕃は刑死し、嚴嵩も官職を解かれ、家產を沒收されて鄉里に窮死している。嚴嵩の傳は『明史』にあっても「奸臣傳」中に收められ、「奸臣」のイメージが定着しているといってよい。とりわけ文學作品のなかに登場する嚴嵩父子はきまって惡玉である。だがそれは嚴嵩が失脚し、さびしく世を去った後のことであって、內閣大學士首輔の地位にあった嘉靖三十八年（一五五九）ごろ刊行され

た嚴嵩の詩文集『鈐山堂集』を開くと、その巻首が當時の政界、文化界における錚々たる人々の序文によって飾られているのを見ることができる。内閣文庫藏嘉靖三十八年序刊本には、張治（嘉靖二十四、一五四五）、王廷相（嘉靖十二、一五三三）、唐龍（嘉靖十、一五三一）、劉節（嘉靖十一、一五三二）、黄綰（嘉靖十二、一五三三）、崔銑（嘉靖十八、一五三九）、孫偉（正德十、一五一五）、王維楨（嘉靖二十五、一五四六）、楊愼（嘉靖二十五、一五四六）、趙貞吉（嘉靖三十八、一五五九）らの序が冠せられている（括弧内は序に記された年）。續いて嚴嵩の肖像があり、ここにまた當時の名士たちが寄せた像贊が並ぶ。清嘉慶十一年（一八〇六）重刊本ではさらに、嚴嵩自身の自序（嘉靖三十七、一五五八）、湛若水（嘉靖三十、一五五一）、唐順之（嘉靖三十八、一五五九）の序文も附せられている。中には内閣大學士になる以前のものも含まれるが、われわれが明代の思想史、文學史などでしばしばその名を目にするような人々が嚴嵩に序文や像贊を寄せ、嚴嵩の政治、文學の能力をほめちぎっているのである。例えば楊愼の序は、

昔の人は「詩は必ず窮して而る後に工なり」といい、また「詩は能く人を窮せしむるに非ず、窮するを待ちて而る後に工なり」といったが、これらの說はまったくのでたらめである。古代について論ずれば、皐陶喜起の歌（『尙書』益稷に見える）、八伯慶雲の詠（『尙書大傳』に見える）、周公七月の風（『詩經』豳風）、召公卷阿の諷（『詩經』大雅・生民之什）は皆朝廷に身を置いて鼎輔（大臣の仕事）にあたったものの歌である。

で書き起こされる。最初に見えるのは歐陽修の「梅聖俞詩集序」からの引用であるが（正確には「蓋し愈いよ窮すれば愈いよ工なり。然らば則はち詩の能く人を窮せしむるに非ず。殆んど窮する者にして而る後に工なるなり」）、司馬遷の「發憤著書」、韓愈の「不平の鳴」などのような、不遇の狀態があってそれが文學作品創造の原動力になるという考え方に眞っ向から反對し、古代の皐陶以下、政治の中樞に身をおきながら、すぐれた詩文を作った人々の例を數え上げている。(2) そして、

わたくしは元老介溪先生嚴公の鈐山堂詩を捧讀して思うところがあった。公は翰林から身を起こし、世に名をはせた。科學の試驗に高位で合格し、翰林學士となり、金華殿で學問を講じ、白虎殿で論議をしていたころから、すでに

人々に惠みの雨を與える人物として囑望され、やがて宮中に出仕し宰相の位に座して、毎日帝のおそばに侍して賡歌し、重ねて雅頌を興した。鐘をうつような大篇は、古樂である韶護の曲を演奏しているようであり、情をよりどころとした美しさは、國風のように輝いている。孟郊賈島のような寒瘦、元稹白居易のような輕俗はその胸のうちに入らないのである。

といって、嚴嵩が官界におけるエリート中のエリートでありながら、詩文をよくすることをほめている。皐陶以下の擧例は、嚴嵩を持ち上げようとするためのものだったのである。(3)

ところが官職を解かれ、それまでの政治への反動がおこってくると、積年の不滿が一氣に吹き出したかのように、嚴嵩への評價は一轉して非難一色の方向になる。『鈐山堂集』に序文を寄せた人々にしても、例えば王維楨の文集について、嚴嵩が宰相であった時に刊行された嘉靖四十年序刊本と、後の萬曆三十四年序刊本とを比べて見ると、前者の卷十四に收められていた「與嚴東樓書」すなわち嚴世蕃への手紙は後者には收錄されておらず、詩についても嚴嵩に贈った詩が三首ほど削られている。收められているものも、前者卷二十「贈吳學士之南都、次介翁元宰韻」であったものが、後者では「贈吳學士之南都、次內閣韻」となっており、嚴嵩との關わりをもみ消す方向で手直しされていることがわかる。王維楨自身は早く嘉靖三十四年（一五五五）の大地震に際して不慮の死を遂げているが、嚴嵩の失脚によってその後人が大慌てをした様が想像される。世の風向きが變わった時、こうした作爲が行われるのは常のことなのであろう。

嚴嵩父子は、文化大革命における所謂「四人組」を思い起こさせる。文革終結後二十年になろうとする今でも、中國文化界について考えようとする場合、やはりポスト文革の枠組みが有效であるのと同じように、明代末期の文化史を考える上で、二十年近くも政治の中心にあった嚴嵩は大きな存在といえるのではないか。この嚴嵩という人物を手がかりにして、明代末期の文化、文學に關する問題を眺めてみようというのが本稿の課題である。

一　嚴氏籍沒の宋版書籍——發端として

嚴嵩、字は惟中、明の分宜（江西）の人。藏書はなはだ豐富であった。『式古堂書畫攷』に「『嚴氏書品冊頁目』：手鈔の宋、元書籍二千六百十三本は、宮中に沒收された。經史子集等のいろいろな書物、計五千八百五十二部套は、各儒學（學校）に配給して收藏させた。道佛などのいろいろな經訣、計九百一十四部套は、各寺觀に配給して讀經に供させた」とある。王世貞の『朝野異聞錄』には「嚴嵩の家から宋版書籍六千八百五十三部を沒收した」ともいう。

この『中國藏書家考略』（楊立誠・金步瀛編　一九二九年）の嚴嵩の條を見て驚いた。王世貞『朝野異聞錄』の「宋版書籍六千八百五十三部」の數字に、である。「部」とある以上、書物の冊數ではなく點數であろう。「四庫全書」に著錄された書物がしめて三千四百五十八種、阿部隆一「宋元版所在目錄」（遺稿集卷一）に載錄されている宋元版の點數が約二千一百種であって、(4) この『朝野異聞錄』なる書物に見える數字は、ずば抜けて多い數字なのである。

筆者はかねてより、明末の書籍出版に關心を抱いている。中國出版史の記述では、宋代の出版に重點が置かれることが多かったのだが、明末にはその量と普及の度合いにおいて大きな變化があったのではないか、と考えてきた。(5) とすると、宋代にこれだけの刊行物があったとするこの「宋版書籍六千八百五十三部」という數は立論の根底をくずされかねないほどの膨大な數字だったのである。

嚴嵩の籍沒された書物について、『中國藏書家考略』では『式古堂書畫攷』から『嚴氏書品冊頁目』を引用していた。『嚴氏書品冊頁目』とは、明の汪砢玉『珊瑚網書憑』卷二十二の「分宜嚴氏書品」の記事である。そしてさらにこの「宋元書籍二千六百十三本」という數を裏附ける資料が存在する。嚴氏籍沒の時に官府が作成した物品リストによる『天水氷山錄』なる書物である。雍正六年（一七二八）の嚴言（嚴嵩の五世の孫）の序によれば、友人の周石林が籍沒冊一編を入手した。刊本ではあったが殘缺がはなはだしく順序もくるっていた。そこでこれを一つの書物とし、『天水氷山錄』という

書名を冠したのであるという。この書物は『知不足齋叢書』に收められている。

このリストには、金製品、銀製品からはじまって、官府に沒收されたおびただしい物品の名前が列擧されているが、そのなかに「實錄ならびに經史子集等書」の一項があって、「書籍八十八部計二千六百一十三本」とする書物のリストがある。それには、

累朝實錄八部　五百七本　手抄
潛虛衍義一部　四本　宋板
誠齋易傳一部　三本　宋板
春秋或問一部　五本　宋板
公穀注疏一部　八本　宋板
內傳國語一部　三本　宋板
爾雅一部　二本　宋板
禮記一部　十本　宋板
禮記纂言一部　十二本　元板
禮書二部　四十本　元板

などのように、その卷數册數とともに版刻についての記載もある。ここに並んでいるものの中には「手抄」「國初板」「新板」などとするものもあるが、大部分は宋元の版本である。『珊瑚網書憑』の「分宜嚴氏書品」にいう宋元版以外の四部の書、および道佛の書については記錄が殘されていないのだが、宋元版八十八種ということであれば、個人の藏書としてまずは妥當な數字である。(6)

實際のところが宋元版八十八種だったということになると、王世貞『朝野異聞錄』の數字の怪しさが際立って見える。

王世貞『朝野異聞錄』なる書物はいかなる書物なのだろうか。

王世貞の『弇山堂別集』に寄せた陳文燭の序（萬曆十八年、一五九〇）には、

（王世貞の著作には……筆者）ほかにも『弇園識小錄』『三朝首輔錄』『觚不觚錄』『權幸錄』『朝野異聞』があるが、これらは枕中の祕であって、いまなお人に示していないのである。

とあって、王世貞に『朝野異聞』なる著書があったらしいということがわかるし、汪闇「明清蟫林輯傳」（『圖書館學季刊』第七卷第一期　一九三三）の嚴嵩の條には、

嚴嵩、字は惟中、分宜の人。宏治の進士。藏書はなはだ豐富であった。その家產を沒收したとき、宋版書籍六千八百五十三部があった。（王世貞『朝野異聞錄』）

とあるから、この汪闇も『朝野異聞錄』を見ていたらしいことはたしかである。だが、いくらさがしてもこの書物がみつからないのである（さっそくで恐縮ですが、ご示教を賜りたいと思います）。また、現在殘っている王世貞の他の著作を繰ってみても、この嚴氏籍沒の「宋版書籍六千八百五十三部」についての記載は出てこないようである。

嚴密な資料批判の立場からすれば、この『朝野異聞錄』にみえる數字あるいは記述は信憑性が乏しく、信頼すべからざる資料として切り捨てられるものであるかもしれないのだが、僞りは僞りなりにそこに筆者の意圖が込められていると考えることも可能である。ここに讀みとられうるのは、とりも直さず作者の嚴嵩に對する惡意である。王世貞の撰になるとされるこの資料が語っていることは、嚴嵩というやつは宋元版の書物を六千八百五十三部ももっていた（かきあつめた）惡いやつだぞ、というメッセージなのである。

嚴嵩の惡者イメージの震源地ともいえるのが、この『朝野異聞錄』の著者とされている王世貞である。次に王世貞の描いた嚴嵩像を考えてみることにしよう。

二　王世貞筆下の嚴氏父子

『朝野異聞錄』が、ほんとうに王世貞の書いたものなのかどうかはわからない。だが、實際王世貞が筆を執って書いた文章を見ても、その嚴嵩に對する嚴しさは際だったものがある。嚴嵩の最期に關する記述にしても、尹守衡『皇明史竊』卷九十二「楊繼盛傳」には「嵩は野寺に寄食して死んだ」とあり、谷應泰『明史紀事本末』卷五十四「嚴嵩用事」には「むかしのなじみのところに寄食して死んだ」とあるのが、王世貞『嘉靖以來內閣首輔傳』卷四嚴嵩に描かれた嚴嵩の末路は、「嵩が死んだ時、墓地の小屋に寄食し、かんおけを準備することもできず、弔うものもなかった」となっている。もちろん今となってはいずれが事實であったのかを知るよしもないのだが、いく種類かの表現があるなかで、王世貞によるそれがもっとも冷酷で嚴しい描き方であることはたしかである。死ぬ時にかんおけがないということは、中國人にとってとてもみじめなことなのである。

また、王世貞『觚不觚錄』（『寶顏堂祕笈』續集）では、

分宜（嚴嵩）が國政を左右していたとき、息子の世蕃はそれを笠に着てやりたい放題のことをし、天下の金銀財寶、かきあつめないものはなかった。その最後の段階になってはじめて法書名畫に及んだのである。思うにこのときになってようやく俗っぽさを避け、あわせて奢侈を競おうとしたのである。そして欲しいものを手にいれるためには、しばしば總督撫按（巡撫按察使）の勢いによって脅迫し、ために身代をつぶし命をうしなうものもあった。そしてその値段はとみにはねあがったのである。

と述べている。先に觸れた『天水氷山錄』には、書籍とともに書畫についても膨大な記述があるが、それらのものはこのように非理無法な手だてによって集められたものだということを告發し、嚴氏父子、とくに息子の世蕃への憤りを記している。また同じく『觚不觚錄』に、

分宜が國政を左右していた時、お金はもっぱら家人の永年から世蕃に渡していた。そして鶴坡と署名していたが、鶴坡をほめ上げぬものはなかった。朱というある御史などは三度も義兄弟と稱し、その他の九卿給事御史は刺を投じても十回に一二回しか目通りできなかった。……後に事敗れて一は絞首刑になり一は斬刑に處せられ、人々は心に快哉を叫んだが、士大夫の體はもはや爛熟して收拾がつかなくなってしまったのである。

とあって、ここでは嚴嵩の家僕であった嚴永年（嚴年ともいう）が主人の威勢を笠に着て、したい放題のことをやっていたこと、そして官僚たちまでもが彼にこびへつらい、ために世の中全體がおかしくなってしまったことを述べている。これも嚴氏一黨に對する嚴しい評價である。

王世貞の嚴嵩評價がいささか嚴しすぎるのではないかということは、當時の人々も感じていたとみえ、沈德符『萬曆野獲編』卷八「嚴相處王弇州」の條では、嚴と王との軋轢の様子について記した後で、

嚴（嵩）、徐（階）の品行のちがいはいうまでもないことである。だが弇州はどの記述に於ても兩公のよいところわるいところを極端なまでに描き出している。恩と怨とがはっきりしすぎているわけであるが、これはまた二公が自ら招いたことでもあった。……華亭（徐階）が必死に弇州を救おうとしたとき、公にどうしてその必要があるのですかとたずねたものがあった。そのとき公は、「このお人は將來必ずや史書の筆をおとりになるであろう。毛錐（筆）で人を殺すこともできるのだ。一たび寄食させたくらいでは才ある士を獨り占めすることはできない。わたしはそれでこの人を手なづけ引き込もうとするのだ。」といった。人みなそのよく人を知ることに感服した。

といったいいかたも見られる。嚴嵩にはもとより事實惡人としての側面があったにせよ、よりによって後に史書の筆をとった王世貞と仲が惡かったことがわざわいしたといういいかたである。つまり今日にまでいたる惡人嚴嵩のイメージの大本には王世貞の怨恨があったということになるのである。實際の嚴嵩がどうであったかを論ずる前に、まずは現在殘る資料にはこういったフィルターがかかっていることを意識しておかなければなるまい。

三　嚴氏父子と王世貞

王世貞の嚴嵩に對する怨恨とはどういったことだったのだろうか。『明史』卷二八七　王世貞傳では、

（王世貞が刑部の官であった時）閻という姓の惡者が法を犯し、錦衣都督陸炳の家に匿われたが、世貞は捜し出してひっとらえた。陸炳は嚴嵩を介して許しを請うたが、世貞は許さなかった。楊繼盛が捕らえられたとき、王世貞はしばしば湯藥をとどけ、その妻が夫の冤罪を訴え出たときには、代わりに訴狀を書いてやった。繼盛が亡くなってからは、棺におさめてやった。嵩は大いに根に持った。吏部で二度も世貞を提學御史にしようという意見がでたが、みな却下してしまい、青州兵備副使とした。世貞の父の王忬が灤河で失策をすると、嚴嵩は事を構えて死罪にしようと獄につないだ。世貞は官を辭して急ぎ嚴嵩のもとに赴き、弟の世懋とともに毎日嵩の門前にはいつくばって、泣きながら寛大な處置を求めた。嵩は陰で忬の獄をとりしきりながら、時にいつわりのことばをかけてなだめた。二人はまた囚人の服を着て道ばたにひざまずき、貴人の輿をさえぎっては、額を地に打ちつけて救いを乞うた。貴人たちは嚴嵩をおそれてあえて何もいわず、忬はとうとう西市で刑死してしまった。兄弟はほとんど氣絶せんばかりに哀號し、棺を持って鄉里に歸り、蔬食すること三年、寢所にも入らなかった。喪があけてからも、なお冠帶をしりぞけ、粗末なわらじと頭巾をつけ、宴會には赴かなかった。

父をむざむざ殺されたことによる嚴嵩に對する怨み、これは簡單に晴らすことのできない大きな怨みであろう。もっとも、嚴氏が王忬を助けなかったことについては、王世貞の側にもそれなりの原因があったようである。『明史』卷二〇四王忬傳に、

忬はもともと頭の回轉の速い人であった。彼がにわかに都御史を拜し、しばしば督撫になったのは、みな帝の特別な拔てきによるものであって、その建言には從わないものはなかった。總督になってしばしば敗戰の報告をするように

なり、それでしだいに寵を失うようになったのである。（忬が）兵を司ることに練達していないと告げるものがあってからというもの、ますますお怒りになり、「忬が怠慢なのは、私にそむくものである。」といわれた。嚴嵩ははなはだ忬が氣に入らなかった。そして忬の子の世貞がたびたび口語によって嵩の子の世蕃の不興を買っていた。嚴氏の客がまたしばしば世貞の家の些事をもとに、嚴嵩父子に事をかまえさせようとした。楊繼盛が死んだ時、世貞はその葬儀をつかさどり、嵩父子は大いに恨みをいだいた。灤河の變が天聽に達し、ついにその企みを實行したのである。

とある。たしかに嚴嵩らの陰險さはあるものの、そもそも原因の一つには、王世貞が「口語によって嵩の子の世蕃の不興を買」っていたこと、つまりことあるごとに嚴嵩らをこきおろしていたことがある。口はわざわいのもと、なのであった。それはたとえば、次に見えるようなことである。

開口世人『李卓吾先生批點四書笑』という書物がある（内閣文庫に林羅山舊藏の抄本が藏される）。その「十目所視、十手所指」（『大學』）の一節。

世廟（嘉靖帝）の時、嚴分宜が權力をにぎっていた。そのとき宮中にもののけがあらわれたが、その姿は多目多手であった。帝がそれを臣下たちにおたずねになったが、だれも知らなかった。時に王元美が（刑部の）郎官であった。人にむかってからかうようにいった。「みんな本を讀んでいないね。こんなに明らかでわかりやすいことがどうしてわからないのかな。」人はそこで何かとたずねると、元美は「『大學』に十目の視る所、十手の指す所というのは、どういうことをいっているのかね。」といった。嚴はひそかにこれを聞くと、深く憎んだ。

會議があった時、分宜（嚴嵩）の息子の世蕃が遲れてやってきた。その場の客が「どうして遲くなったのですか。」とたずねると、世蕃は「ちょっと風邪（傷風）氣味でして。」と答えた。王元美は芝居の『琵琶記』の中の文句を唱って、「ちちが宰相の地位にあって、どうして傷風（風邪の意と風俗を傷つけるの意をかける）などといいましょうや。」といった。おもうにふざけてきらわれたことは、一度や二度のことではないのである。

題目になっている前半の方は、『大學』本文の「十目の視る所、十手の指す所、其れ嚴なるか。」を踏まえている。だれでもが知っている『大學』の文章を用いて、宮中にあらわれた多目多手のもののけは「それ嚴（嵩）なるか」といっていることになる。

後半の方では、戲曲『琵琶記』の第三十一齣「幾言諫父」の中の言葉「父上は宰相の地位にあって、どうして風俗を傷つけるような非理のことばをいうことができるのでしょう。」にもとづいている。『琵琶記』の主人公蔡邕が都に出て科擧に合格し、牛宰相の娘（牛氏）と結婚させられようとするが、蔡邕には鄉里にすでに妻のあることを知った牛氏が、父親を諫める言葉である。この一部分を嚴嵩父子の立場と重ね合わせてあてこすっている。

內閣文庫の『李卓吾先生批點四書笑』は鈔本であるが、封面などもそのまま寫されており、いかにももとの刊本が存在し、それをそのまま寫したもののようである。刊本としては、東京大學文學部藏『絕纓三笑』のうちの「儒笑」が、題こそちがっているが、そっくりそのままこの內容にあたる。(7) これらの話は有名であったと見え、前半の『大學』の話が『雪濤諧史』に、後半の『琵琶記』の話が『西山日記』、『皇明世說新語』卷七などにも見えている。

以上見たところから考えると、嚴嵩父子がとりざたされるとき、ただちにその對立者としての王世貞が思い出される、つまり嚴嵩父子對王世貞というのが、一種の公式的通念になっていたことがわかる。

四　嚴嵩批判の文學作品

嚴嵩の失脚後（あるいはそれ以前にも？）戲曲・小說などさまざまなジャンルで嚴嵩批判の作品があらわれている。本節では、それらの文學作品と王世貞との關わりについて考えることにしたい。

『嚴嵩傳』（黃山書社　一九九二年）の著者張顯淸氏は、その第二十三章に「文學作品中的嚴嵩父子」の一章を設け、嚴氏父子が沒落してからというもの、それを題材にした民閒や文人の文學作品は枚擧に暇がないほどである。四百年

後の今日に至っても、芝居の『打紅袍』『五女拜壽』などの嚴嵩ものは、なお觀客が好んで見る演目なのである。われわれは嚴氏父子を題材にした文學作品を「嚴嵩文學」と總稱してもかまわないであろう。として、「嚴嵩文學」という概念を提唱しておられる。たしかにその範圍は芝居をはじめ、小說その他幅廣い分野に及んでいる。

ここではまず、戲曲の『鳴鳳記』を取り上げてみたい。(8)『鳴鳳記』は、嚴嵩、嚴世蕃、趙文華、鄢懋卿らの惡役と、夏言、曾銑、楊繼盛、鄒應龍、林潤らの忠良の善玉との對立を描いた作品であり、彼らがいずれも實名で登場する。作品中の中心的な登場人物は鄒應龍、林潤であるが、最後に彼らの上疏が通って、嚴氏父子が處罰されるところまでを演ずる。基本的なすじは史實にしたがっているといってよい。『金瓶梅』と『鳴鳳記』については、荒木猛氏「『金瓶梅』と楊繼盛」(『長崎大學教養部紀要(人文科學篇)』第三十六卷第二號　一九九六年)があり、參考にさせていただいた。

『鳴鳳記』には、嚴氏が籍沒され、嚴世蕃が處刑されたことまでが描かれているから、そのことのあった嘉靖四十四年(一五六五)以後に作られたものであろう。そして、萬曆三十八年(一六一〇)の呂天成『曲品』には著錄されているから、それ以前にできあがっていたことはたしかである。清初褚人獲『堅瓠集』廣集卷三「金優」に次のようにある。

海鹽に金鳳という少年俳優がいた。若いときその器量によって分宜の嚴東樓(世蕃)に寵愛された。東樓は晝は金がいなければ食事もしないし、夜は金がいなければ寢られなかった。金は容色が衰えてからは、貧里に寄食していた。東樓が沒落して王鳳洲の『鳴鳳記』が流行すると、金はふたたびおしろいを塗ってみずから東樓に扮した。よく知っていたために、擧動はそっくりであって、ふたたびその名が揚がった。先に嚴に目をかけられたことはまったく問題にしなかったのである。

この資料では嚴嵩父子が失脚してから『鳴鳳記』が流行したといっており、嚴世蕃に寵愛された俳優が役を演じたというのだから、『鳴鳳記』が作られたのは、嚴氏沒落以後あまり時がたっていないころのことになる。ここで褚人獲は「王

鳳洲の『鳴鳳記』と記している。呂天成の『曲品』には作者の氏名は記されていなかったのであるが、清初の褚人獲のころ（『堅瓠集』廣集には康熙三十八年、一六九九の序が附されている）には、『鳴鳳記』＝王世貞というのがごくあたりまえになってしまっていたことがわかる。清の無名氏の『傳奇彙考標目』にも、

王世貞、字元美、號鳳洲。太倉人、前明詩人後七子之一。『鳴鳳』。

という記載がある。『傳奇彙考標目』は、『中國古典戲曲論著集成』（中國戲劇出版社　一九五九年）に翻刻され、その「提要」では、やはりほぼ康熙の末年あるいは雍正の初年ごろの作ではないかとされている。

清の焦循の『劇說』（嘉慶十年、一八〇五に成る）卷三に、

言い傳えによれば、『鳴鳳』傳奇は弇州の門人の作であって、「法場」の一折だけが弇州の自作である。作品ができたばかりの時、俳優に上演させ、縣令を招いていっしょに見た。令は顏色をかえて立ち上がり、すぐにもその場を去ろうとした。弇州はおもむろに邸抄を出して示して、「嵩父子はもうおわりだよ。」といって宴會をお開きにした。

という話が見える。「法場」とは刑場のことで、おそらく『鳴鳳記』第十六齣「夫婦死節」の一幕、楊繼盛刑死の場面を指すであろう。こうした傳說もあるくらいで、遲くとも清代康熙朝以後には『鳴鳳記』の作者が王世貞であるとすることは定說になっており、人々は『鳴鳳記』と聞けばあやまたずに王世貞を思い浮かべたようである。(9)

こうした通說に對して、蘇寰中氏は「關於『鳴鳳記』的作者問題」において、王世貞が作者ではないことを論證している。その論據は、例えば今の『劇說』に見えるエピソードで、『鳴鳳記』には嚴世蕃處刑後のことまでが描かれているのに、たったいま處罰がきまったばかりの時點で、先のことがわかったはずがないこと、また嚴嵩が離官し、嚴世蕃が逮捕された嘉靖四十一年には、王世貞は嘉靖三十九年に刑死した父の喪中であって、客を招いて宴會などしているはずはないこと、などなどである。

蘇氏の議論は、いずれももっともな議論である。おそらく確かに『鳴鳳記』の眞作者は王世貞ではないのであろう。そ

して眞作者はおそらく今となってはもはや捜し出すことはできないのにちがいない。しかし、ここで筆者が問題にしたいと思うのは、明末の時點で作者不詳であった作品の作者として王世貞の名前があがってくる必然性とそのプロセスなのである。つまりこの點については、すでに前節で見たように、嚴嵩對王世貞という對立の構圖が廣く流布しており、そのため後世の人が嚴嵩批判の作品を見たとき、そこにごく自然に王世貞の姿を見いだしたということなのではなかろうか。

『鳴鳳記』は、明末にかなり流行したらしい。侯方域の「馬伶傳」は、馬錦という俳優のことを記した文章であるが、そこに『鳴鳳記』上演のことが出てくる。明末の南京には、「興化部」と「華林部」という二つの大きな劇團が競っていた。ある日、新安の商人が二つの劇團を同時に招いて上演させ、競爭させた。出し物は同じ『鳴鳳記』である。興化部の嚴嵩役は馬伶。華林部の嚴嵩役は李伶であった。この時、李伶の演ずる嚴嵩が大受けに受けて、馬伶は途中から芝居をつづけることができなくなってしまった。馬伶は競爭に破れて姿をくらましてしまう。やがて三年後、馬伶は再び華林部との競演を挑む。すると今度は馬伶の技量が李伶を壓倒し、ついには華林部が馬伶を師とするまでにいたる。どうしてこれだけ上手になったのか、とたずねられると、馬伶は競爭に破れた後、直ちに北京に赴き、當代の嚴嵩たる顧秉謙の屋敷の門番として入り込み、三年の閒、奸臣の行動を觀察した結果が演技となってあらわれたのだ、という話である。

顧秉謙は、宦官の魏忠賢につきしたがって權力をふるっていた人物であって、おそらくこの話も、魏忠賢が權力を握っていた天啓年閒のことであろう。とすると、天啓年閒にこの『鳴鳳記』が好んで上演されていたことの意味も明らかになってくる。嚴嵩批判すなわち魏忠賢批判なのである。魏忠賢の時代に魏忠賢を批判しようとすれば、本人を直接出すわけにはいかない。そこで、惡者としてすでに評價の定まった嚴嵩を持ってきたということになるのではなかろうか。

次に小說『金瓶梅』である。ここでも作品の中で風刺されているのは嚴氏父子であり、『金瓶梅』の作者、蘭陵の笑笑生とは、ほかならぬ王世貞であるという見方が存在している。存在しているというどころではなく、先の『鳴鳳記』の場

合と同様、王世貞作者説こそが、今世紀にいたるまでの通説だったのである。近代になって本格的な『金瓶梅』研究がはじまったとき、魯迅、吳晗、鄭振鐸(10)などがまず手始めにしたことといえば、この王世貞作者説の否定という作業なのであった。(11)

ここではどうして王世貞が作者に擬せられ、そして近代にいたるまでの長い間、その説が通ってきたのかということを問題にしてみたいと思うのである。『金瓶梅』における王世貞作者説の形成普及のプロセスを中心にして、『金瓶梅』の成立年代、作者に關する問題を考えてみたい。

『金瓶梅』の成立年代と作者に關して、早い時期に具體的な情報を提供しているのが、明末沈德符『萬曆野獲編』卷二十五「金瓶梅」の條である。

聞くところによれば、これ（『金瓶梅』）は嘉靖間の大名士の手筆であって、時事を批判しているとのことである。たとえば蔡京父子は分宜（嚴嵩）を指し、林靈素は陶仲文を指し、朱勔は陸炳を指し、それ以外にもそれぞれ指すところがあるのである。……

この敍述はあるいは萬曆四十五年序を附す『金瓶梅詞話』の廿公「金瓶梅跋」の「『金瓶梅傳』は世廟（嘉靖帝）の時の一鉅公の寓言である。思うに誰かを風刺しているのである。」とあるのを踏まえているのかもしれないが、より具體的に『金瓶梅』の作者は「嘉靖年間の大名士」であって、嚴嵩とその一黨を風刺したものであるというのである。作品中の崇政殿大學士蔡京は、息子の蔡攸とともに權勢をほしいままにし、西門慶らからの賄賂を受けて、事件のもみ消しをはかったり、西門慶を官職につかせたり、惡黨の元締めであって、ここに嚴嵩父子の姿が投影されているというのもうなずける。この一條では作者の名前が伏せられた形で記載されているが、魏子雲氏は、同じ『萬曆野獲編』卷二「僞畫致禍」の條に「清明上河圖」をめぐる嚴嵩と王家との對立が記述されており、この「金瓶梅」の條と「僞畫致禍」の條とを讀み合わせることによって、自然と「嘉靖間の大名士」が王世貞であることが讀者に暗示されるしかけになっている、そしてこ

の『萬曆野獲編』が王世貞作者傳說の源泉になっているのだと主張される。(12)『金瓶梅』の作者が實際に誰かということはわからない。また本當に作者が嚴嵩批判のために書いたのかどうかも今となってはわからない。しかしながら、少なくとも當時の『金瓶梅』の讀者の中に、あ、これは嚴嵩だな、と作中に嚴嵩一派の影を讀みとったものがあったことは確かなのである。

引用したこの部分の前には、萬曆三十七年（一六〇九）のこと、沈德符が北京で袁宏道に逢って、『金瓶梅』の全部を持っているかどうかたずねた時、ほんの數卷を見ただけだが、麻城（湖北）の劉延白承禧の家には全本があって、それはその妻の實家である徐文貞（階）から手にいれたものであろう、という敍述がある。徐家と劉家の婚姻に關して、やはり沈德符『萬曆野獲編』卷八「遠婚」の條に、

最近、遠くの人と婚姻を結んだものとしては、嘉靖間に松江の徐文貞が陸、劉兩緹帥と婚姻を結んだのがある。どちらも楚（湖北）の人である。

という記述がある。『金瓶梅』全本の出所が果して徐階であったとすれば、この徐階こそは、嚴嵩を追い落とし、內閣大學士首輔の座についた人物であり、しかも王世貞はその徐階とよい關係を持っていたのである。『金瓶梅』に嚴嵩が批判的に描かれているということになれば、この徐階との關係もそれなりに理解できるし、その作者として王世貞の名前が浮かび上がってくるのも自然であろう。

『金瓶梅』の初期の流傳の狀況を示す資料では、この『萬曆野獲編』以外にもしばしば王世貞の姿がちらついている。例えば屠本畯の『山林經濟籍』。

言い傳えによれば、嘉靖年間に、ある人が陸都督炳の虛僞の上奏によってその家を籍沒されてしまった。その人は晴らしようのない無實の罪を、『金瓶梅』に託した。王大司寇鳳洲先生は家に全書を藏していたが、いまはもう散逸してしまった。

ここでももちろん『金瓶梅』の作者が王世貞であるといっているわけではないが、陸炳が嚴嵩の子分であり、先の『明史』王世貞傳に見たように、王世貞が刑部の官にあったとき、この陸炳と直接衝突していたことを考えれば、そして、王世貞がかなり早い段階で『金瓶梅』の全本を持っていたということであれば、その作者が少なくとも王世貞にかなり近いところにいた人物であったというところまでは確認できるであろう。

さらに謝肇淛『小草齋文集』巻二十四に收められる「金瓶梅跋」には、

『金瓶梅』という書物には、作者の名前や年代を記していない。いいつたえでは、永陵（嘉靖帝）のときある金吾戚里（天子の外戚である近衛指令官）が、天子の威光を笠に着て贅澤三昧をし、やりたい放題のことをしていた。その門客がそれを憂え、日毎の行動をとりまとめて書物に編み、西門慶に假託したのである。（中略）この書物は以前は刊行されておらず、書き寫されて流傳していて、長さもふぞろいで散逸したものもあった。ただ弇州家藏のものが最も完全でよいものであった。……

とある。ここでは『金瓶梅』はある金吾戚里の行動をその門客が記錄したものという。明代嘉靖朝の「金吾戚里」で放肆なふるまいのあった人といえば郭勛が思い浮かぶ。郭勛といえば『水滸傳』（郭武定本）を刊行した人としても知られる。嚴氏ではないわけだが、ここでも王世貞の家に『金瓶梅』の完全なテキストがあったとされている。

上記の資料の段階では、王世貞が作者であると名前を擧げていたわけではないが、清初顧公燮の『消夏閑記摘抄』巻上「金瓶梅緣起王鳳洲報父仇」の一條になると次のようにある。

（王）忬の子鳳洲（王世貞）は父が冤罪で死んだことを嘆き、報復しようと思ったが手だてがなかった。ある日たまたま世蕃に目通りした。世蕃は「坊間に何かおもしろい小說はあるか」とたずねた。「あります」と答えると、その名を問うた。鳳洲はとっさに、金の瓶に梅が飾られているのを見て、『金瓶梅』と答えた。しかし讀みにくい字が多いから寫しなおして屆けましょうといった。退出して想を練ること數日、『水滸傳』の西門慶の故事を藍本にして、

世蕃は西門に住んでおり、乳名を慶といったのにちなんで、ひそかにその閨門の淫亂で放埒なのをそしった。世蕃は氣づかずに、それを見て大いによろこび、手に取って下に置かぬありさまだった。

ここでは王世貞が『金瓶梅』を書いて、嚴氏を風刺したということになっている。話はさらに進んで、王氏が『金瓶梅』を書いて嚴世蕃を毒殺し、父のかたきを討ったというところまで尾鰭がついていく。その一つに『寒花盒隨筆』（作者、成立年未詳）がある。

「『金瓶梅』一書は王弇州先生の手筆であって、嚴世蕃を風刺したものである。書中の西門慶は世蕃の化身である。世蕃はまたの名を慶といった。西門も慶という名である。世蕃は東樓という號であって、この書では西門と對になっている」と世に傳えられている。あるいはまた「この本はある孝行息子の作であって、それによって父の仇を討とうとしたものであるともいう。孝行息子の識っていたある大物が實は孝行息子の父を殺したので、仇を討とうとねらっていたが、ずっとはたせなかった。後にたまたまこの大物が書見をするとき、きまって指につばをつけてページをめくることを察知した。孝行息子はそこで三年の力をこめてこの書物にとりくんで、書ができあがると紙のはしに毒藥を塗っておいた。大物が外出するときに、人に本を持たせて町で賣らせ、「天下第一奇書」と叫ばせた。大物は車の中でそれを聞き、すぐに見ることを求めた。車が進んで屋敷についた時には、書はすでに見終わっており、しきりに嘆賞した。賣っていたものを呼んで値段をたずねようとしたが、姿がみえなかった。大物ははかられたと急に氣がついて、いそいで手當をしようとしたが閒に合わずに、毒がまわって死んでしまった。」ともいう。

いま考えるに、この二つの説ともにもっともである。孝子とは鳳州であり、大物とは唐荊川である。鳳州の父の怦が嚴氏によって死んだのは、實は荊川が手引きをしたのである。……

あるいはこの書物は東樓を毒殺するために書かれたというものもあるが、東樓は處刑されたのであって、毒殺されたのは唐荊川である。……

ここで唐荊川すなわち唐順之が登場することの背景には、もう一つの物語がある。嚴嵩が王氏の持っていた『清明上河圖』をほしがったとき、王忬はそのコピーを作らせ、コピーの方を嚴氏に贈ったのを唐順之が見破り、それによって嚴氏は王氏に對して根に持つようになったというのである。したがって、結果として父の王忬を殺されてしまった王世貞にしてみれば、唐順之が父の仇になるというわけである。この閒の事情については、すでに吳晗の「『金瓶梅』的著作時代及其社會背景」の一文で詳しく紹介されているので、ここではこの『清明上河圖』についてはこれ以上深く述べることはしない（『金瓶梅』と王世貞については宋起鳳『稗說』卷三「王弇洲著作」にも見える）。

ただここでもいえることは、『金瓶梅』は嚴嵩と關係があるのだ、嚴嵩批判の作品だと考えた瞬閒に、嚴と對立の關係にあった王世貞の名前がその作者として浮かび上がって來ていること。あるいは逆に、作者が王世貞であるといった瞬閒に、嚴嵩父子批判の作品と理解されたことなのである。これが事實であったかどうか、それは今となってはわからない。しかし、明末以來、多くの人々が長い閒にわたって『金瓶梅』作者王世貞說をもっともなことと考えていたのは、とにかく嚴嵩と王世貞の對立という歷史的文脈と、作中の登場人物の描かれ方（ただし誰が嚴氏の反映かということでは、蔡太尉、西門慶などちがった見方がなされている）とにじつにみごとな整合性があったからなのである。そう思って讀んだ方が、かつての中國の讀者にとってはおもしろかったということでもある。

『金瓶梅』一書は鳳州の門人の作と傳えられている。あるいは鳳州自身の手になるものともいう、とある。というぐあいに王世貞作者說をうたった序文（康熙三十四年、一六九五の謝頤「第一奇書序」）が冒頭に附された『金瓶梅』のテキスト（張竹坡本）が、今世紀の『金瓶梅詞話』テキストの再發見にいたるまで、清一代を通じて通行するのである。

『金瓶梅』作者としては、最近多くの研究者によっていろいろな人の名が擧げられている。その一人に李開先がいる。(13) 李開先が『金瓶梅』作者とされる根據の一つに李開先の戲曲『寶劍記』からの引用が『金瓶梅』の中にたくさん見られるということがある。『寶劍記』は『水滸傳』の林沖が主人公になっている戲曲であり、高俅父子と林沖との對立が主たる

あらすじになっている。この高俅父子が嚴嵩父子を意識しているのだとする見方がある。やはり沈德符の『萬曆野獲編』卷二十五「塡詞有他意」で、

李仲麓の『寶劍記』は分宜父子を指している。

という。『寶劍記』は惡らつな權力者のもとで不遇な目にあう林沖が主人公であるが、作者の思いもそこに重ね合わせられており、この作品の基本的な情調は不平不滿であるといってもよく、こうしたところが、『金瓶梅』と共通するともいう（この點は日下氏によって指摘ずみ）。

引用があり、傾向が似ていることが、同じ作者が書いたことの完き證據となるかどうかはわからないが、それにしても『金瓶梅』作者に擬せられる李開先がやはり嚴嵩批判の作品とも理解された戲曲『寶劍記』の作者であることは興味深い。もっとも李開先の場合には、嚴嵩が內閣大學士になるより前、嚴嵩の對立者でもあった夏言によって免職になっているのであって、もしその不平の對象が夏言なりとすれば、嚴嵩批判とするのは當たらなくなる可能性もあるのだが。

嚴嵩批判の文學作品としてはさらに馮夢龍編の「三言」の一つ、『古今小說』卷四十「沈小霞相會出師表」がある。主人公の沈小霞は、嚴嵩にたてついたため殺されてしまった沈鍊の息子である。嚴嵩は、沈小霞をも殺そうとするが、妾の聞氏や科擧同年の馮主事によって助けられ、嚴氏沒落の後、母や末弟と再會するという話である。沈鍊については王世貞が墓誌銘を書いている（『弇州山人四部稿』卷八十六）。

嚴嵩によって殺されてしまった人々のうち、後世追憶されることの最も多いのが楊繼盛であろう。楊繼盛については、楊をかばったことが王世貞が嚴嵩にきらわれた理由の一つになっているほどであって、王世貞とも關係が深い。清の陳焯の『湘管齋寓賞編』は、彼の目睹した書畫の記錄であるが、その卷三に楊繼盛の絕筆（楊忠愍與鄭端簡書）と、それに題した王世貞、王治、屠隆、吳執御そして馮夢龍の詩文を載せている。屠隆は、黃霖氏によって『金瓶梅』作者に擬せられた人物である。[14] 王世貞にせよ、この屠隆にせよ、『金瓶梅』作者に擬せられる人物の多くは何らかの形で反嚴嵩という立場

の人々である。馮夢龍が「沈小霞相會出師表」の『古今小說』の編者であることはいうまでもない。

『金瓶梅』の作者が誰かということは現在の時點では完全には決め難いと思う。どの說を見ても、なるほどと思わせる點があると同時に、缺點もあるからである。ここで嚴嵩と王世貞との對立という視點からこの問題を考えてみたのも、決して王世貞が作者であると主張せんとしてのことではない。ただ、ここで確認できることは、少なくとも明代萬曆年閒にこの『金瓶梅』を讀んだ人々が、作中に嚴嵩父子の影を讀みとったこと、そしてそこから嚴嵩と對立的立場にあった王世貞を作者であると考えたこと、その結びつきがきわめて自然であったために、その後何百年にもわたって、その見方が定着してきたということである。あるいはさらに一步進んで、『金瓶梅』の作者は王世貞でなかったとしても、少なくともその近くにいた人であったということまでは斷言してよいのかもしれない。

五　『金瓶梅』と『天水氷山錄』

以上、嚴嵩に關係する文學作品について、特に王世貞とのかかわりから考えてみた。最後に再び『金瓶梅』について、はじめに少しだけ觸れた『天水氷山錄』を材料に別の角度から考えてみたい。

『金瓶梅』の描寫については、その描寫がたいへんに細かく精緻になっているということが以前から指摘されていた。(15) だが、その細かさには一つの特徵があると思われる。例えば、『金瓶梅』第十四回、潘金蓮の誕生日で金蓮が着飾って登場する場面を見てみよう。

そういっているところへ、潘金蓮が姿を現わしました。上には「香色潞紬雁啣芦花樣對衿袄兒」「白綾竪領花眉子溜金蜂赶菊鈕扣兒」、下には「一尺寬海馬潮雲、羊皮金沿邊挑線裙子」「大紅段子白綾高底鞋」「粧花膝褲」をつけ、「青寶石墜子」「珠子箍」をして孟玉樓と同じようないでたちです。ただ月娘は、「大紅段子袄」「青素綾披袄」「沙綠紬裙」、頭上には「鬏髻貂鼠臥兎兒」をつけている。玉樓は座席から金蓮が厚化粧をして鬢髮に一本の「金壽

字簪兒」を挿しているのをみて、……

物の名前に關しては原文のまま掲げたのだが、描寫の細かさというのが、物の名前の細かさ、その數の多さに由來していることが見て取れるのではないかと思う。そして、その細かさというのは、どことなくカタログ的な細かさなのである。

こういった種類の描寫というのは、以前の小説には必ずしも多くはない。いうまでもなく、『金瓶梅』は『水滸傳』から生まれた作品ではあるが、『水滸傳』に登場する潘金蓮などはもう少しさらりと描寫されている。例えば、第二十四回、金蓮が武松を誘惑しようとする場面。

かの婦人はすぐに二階にのぼっていくと、白粉をつけなおし、さらに髷をゆいなおすと、つややかな色の服に着替えて、門の前に來て武松を出迎えます。

ここでは金蓮の衣服について觸れてはいるが、「つややかな色の服」という以上の描寫はなく、これでは實際どういう服を着ていたのかわからないのである。とはいっても『水滸傳』中にも同じような物の描寫はないわけではなく、例えば第七回、林沖がはじめて登場する場面の描寫。

頭には一頂の「青紗抓角兒頭巾」をかぶり
後ろには二つの「白玉圈連珠鬢環」
身には一領の「單綠羅團花戰袍」を着
腰には一條の「雙搭尾龜背銀帶」を結び付け
一對の「磕瓜頭朝樣皂靴」をはき
手には一把の「摺疊紙西川扇子」をもっていた。

ここに見える物の描寫の仕方には、『金瓶梅』のそれに通じるものがある。

他にこれに似た例が見られるのが、萬曆期に編纂刊行されたと思われる馮夢龍の民間歌謠集『山歌』の卷九「燒香娘

娘」においてである。これは、ある奥さんが願ほどきのために蘇州郊外の寺参りに出かけて行く様子を歌にしたものである。寺参りといっても實際は物見遊山なのであって、そのために近所の人々から装飾品を借りて着飾って行く。その部分の描寫。

（白）ねえさんがおばさんにいう「どうあろうとも
頭には眞珠をはめこんだ白鳥のようなビロードで飾られたかもじを
ひとつかしてもらえないかしら
芙蓉の花の模様のある錦の頭巾を一つかしてはくれないかしら
蘭の花のついた玉のかんざしを一つかしてはもらえないかしら
丁香の腕輪を一つかしてはもらえないかしら
徐大家のかみさんは金のふちどりのある玉觀音の鬢どめをもっている
陳肉屋の新婦は金の桃をくわえた鳳凰のかみかざりを二つもっている
張のねえさんは金メッキの胡蝶の髪飾りをもっている
李三阿媽からは翡翠のついたかまきりの髪飾りをかりる……

舞臺は蘇州であるが、蘇州の奥さんたちの持ち物の描寫において、先のいわゆるカタログ的な物の名前の表し方が出てくるのである（後の時代の『紅樓夢』などにも同じような描寫はあらわれる）。

『金瓶梅』あるいは馮夢龍の『山歌』などに見られるようなこのカタログ的な物の名、物についてのこうした表現の仕方はいったいどのようなところから出てくるのであろうか。

實はこれらと同じような表現方法による物の名前が、はじめに觸れた嚴嵩の籍沒品のリストである『天水氷山錄』に見えているのである。『天水氷山錄』は、籍沒品を金、銀、玉、段、書畫などに區別して列擧したリストである。たとえば

「金」のうち首飾の一部の品名を記すと、

金廂玉寶摺糸首飾
金廂玉點翠珠寶首飾
金廂玉花首飾
金廂玉仙玉兎首飾
金廂玉人物花草首飾
金廂玉草蟲首飾
金廂玉寶人物鳳鳥首飾

また「段」のはじめの部分には、

大紅粧花五爪雲龍過肩段
大紅織金粧花蟒龍段
大紅粧花過肩雲蟒段
大紅遍地金過肩雲蟒段
大紅粧花飛魚雲段
大紅織金飛魚補段
大紅粧花過肩斗牛段

とある。こうした物の名前のあらわし方は、たとえば宋代すでに奢侈を禁止した法令などにも似た言い方はあらわれている。[16] だが、具體的な物の名前の表現についてはもう少し簡略のようである。

いうまでもなく、物そのものは大昔からあったにせよ、その物の名前をこういった形でカタログ式に表現することは、

あるいは明代のこのころにはじまるのではないか。あるいは明代における物の氾濫が、カタログ式の物の言い方を必要とし、それが『天水氷山錄』のような官府の籍沒リストや文學作品にも反映したということなのではなかろうか。

なお、王世貞の『觚不觚錄』に、

世廟（嘉靖帝）は晩年朝政を行わず、そのため臣下たちの服飾は身分によらなくなった。三品のしめるものは、金鑲彫花銀母象牙明角沈檀帶である。四品はみな金鑲玳瑁鶴頂銀母明角伽楠沈速帶、五品はみな彫花象牙明角銀母筈帶、六七品は五品と同じで素帶と決められていたのだが、本來の規則どおりの色を用いるものはいなかった。……

という一條がある。朝廷の有職故實に詳しかった王世貞のこと、當然官員の服飾に關してもそれなりの知識があったはず。あるいはこのあたりにも王世貞と『金瓶梅』との一線が見いだされるのかもしれない（もちろんこれだけで王世貞が作者であるというつもりもないが）。『天水氷山錄』の中で先に擧げた「段」のうち、爪が五つの龍の文様は皇帝だけが着用できた服であって、嚴嵩がそんなものをもっていたこと自體がとんでもないことである。『金瓶梅』第五十五回で蔡太尉の誕生日に西門慶が贈った祝いの品々の中にも「大紅蟒袍一套、官綠龍袍一套」がある。こうした細部にも當然作者の批判の目が光っていることは確かであろう。なお、『金瓶梅』中の官服については、荒木猛氏が「金瓶梅補服考」（『長崎大學敎養部紀要（人文科學篇）』第三十一卷第一號　一九九〇年）で詳しく檢討されている。

結　び

本稿では、嚴嵩という人物から、『金瓶梅』など當時の文學作品について考えてみた。現在『金瓶梅』研究は大陸を中心に活況を呈しているが、そのテーマは作品の成立年代考と作者考に集中している。中國では明末から清朝一代を通じて、『金瓶梅』という作品は王世貞が嚴嵩批判の意圖で書いた作品と考えられてきた。現在の『金瓶梅』研究はその通說（というより傳說）の否定から出發している。本稿で嚴嵩と王世貞の關係を中心に考えたのは、ある意味では研究の流れに

逆行するものであるが、あえて當時の常識のコンテクストにもどり、傳說そのものの背景と意味を考えてみた次第である。本稿で行った作業は、いわゆる文學作品の研究というよりは、文學作品をめぐる言說（あえて雜音といってもよいかもしれない）の檢討である。しかし、當時の讀者にとって、こうした雜音を拔きにした作品の讀みがあったとは思われない。張顯清氏のいわれる「嚴嵩文學」、このテーマはまだまだ先へひろがりそうである。

註

（1）嚴嵩を正面から取り上げた研究も近年あらわれている。
曹國慶・趙樹貴・劉良群『嚴嵩評傳』（上海社會科學院出版社　一九八九年）
江西省社會科學院歷史研究所・江西省分宜縣方志辦編『嚴嵩與明代政治』（上海社會科學院出版社　一九八九年）
張顯清『嚴嵩傳』（黃山書社　一九九二年）
曹國慶『嚴嵩年譜』（中國人事出版社　一九九五年）
これらの書物は山根幸夫教授より借覽させていただいた。記して感謝いたします。

（2）不平不遇と文學については拙著『不平の中國文學史』（筑摩書房　一九九六年）に記した。

（3）序文にはお世辭という要素もないではないが、嚴嵩は詩に關しては實際高く評價されている。錢謙益『列朝詩集小傳』「嚴嵩」の條では「わたしは嚴嵩の詩を收錄したが、嘉靖朝後半の將相の中ではトップに位する」と稱している（錢謙益は、嚴嵩に敵對した王世貞がきらいだったという要素もあるが）。朱彝尊の『靜志居詩話』卷九でも、王世貞「樂府變」の「孔雀は毒有りと雖も、文章を掩うこと能はず」という嚴嵩評價の句を「平情の論」であるとして、その詩文の能力を稱えている。

（4）阿部隆一「宋元版所在目錄」（遺稿集卷一）に記載される宋元版は、經部五四〇點、史部三四〇點、子部六六〇點、集部六〇〇點である（いずれも概數）。

（5）拙稿「明末江南における出版文化の研究」（『廣島大學文學部紀要』第五十卷特輯號一　一九九一年）。その後、宋代とりわけ南宋にあっては、かなりの出版の普及があったのではないか、つまり出版點數の上では南宋と明末との二つの山ができるような形になるのではないかという方向に考えが變化してきたが、これについてはまた稿を改めて論じなければならない。

（6）八十八種の書物は明の內府に沒收されたというが、後の清の宮中にあった善本の目錄である『天祿琳琅書目』卷六に見える『續文章正宗』には「鈐山堂藏書記」その他の印が押されているとして、嚴氏の舊藏であったことがわかる。『天水

氷山錄』にも「續文章正宗二部　一十六本　元板」と見えている。

(7) 大塚秀高「『絕纓三笑』について」（『中哲文學會報』第八號　一九八三年）がある。

(8) 『鳴鳳記』については、蘇寶中「關於『鳴鳳記』的作者問題」（『中山大學學報』一九八〇年第三期）、李焯然「從『鳴鳳記』談到嚴嵩的評價問題」（同氏『明史散論』允晨文化實業股份有限公司　一九八七年）がある。

(9) 毛晉汲古閣『六十種曲』に收められる『鳴鳳記』には、本來作者の名は記されていないのであるが、民國二十四年（一九三五）開明書店の排印本では卷首に「明王世貞著」と記されている。

(10) 魯迅『中國小說史略』第十九篇「明之人情小說(上)」（一九三五年）。吳晗「『清明上河圖』與『金瓶梅』的故事及其衍變」（『清華周刊』第三十六卷第四―五期　一九三一年）、同「『清明上河圖』與『金瓶梅』的故事及其衍變・補記」（『清華周刊』第三十七卷第九期　一九三二年）、同「『金瓶梅』的著作時代及其社會背景」（『文學季刊』第一卷第一期　一九三四年）。鄭振鐸「談金瓶梅詞話」（『文學』第一卷第一期　一九三三年）。

(11) 朱星『金瓶梅考證』（百花文藝出版社　一九八〇年）は作者王世貞說を主張している。

(12) 魏子雲『金瓶梅的問世與演變』（時報文化出版事業有限公司　一九八一年）第一章第三節「傳說王世貞作金瓶梅的最早傳說者」。

(13) これはもともと吳曉鈴氏がその可能性を示唆され（中國社會科學院『中國文學史』人民文學出版社　一九六二年）、のちに徐朔方氏が「寫定者」としてとりあげ（「『金瓶梅』的寫定者李開先」『杭州大學學報』第一期　一九八〇年）、日本の日下翠氏（「『金瓶梅』作者考」『中文研究集刊』創刊號、中國文學研究會　一九八八年）、また卜健氏が作者に擬しておられるものである（「金瓶梅作者李開先考」甘肅人民出版社　一九八八年）。また李開先の戲曲『寶劍記』に關しては、日下翠「『金瓶梅』と『寶劍記』」（同氏『中國戲曲小說の研究』研文出版　一九九五年）がある。

(14) 黃霖「『金瓶梅』作者屠隆考」（『復旦學報』社會科學版　一九八三年第三期）ほか。

(15) 例えば最も新しくは日下翠『金瓶梅　天下第一の奇書』（中央公論社　一九九六年）第一章。

(16) 勝山稔「北宋代における奢侈禁令の考察―眞宗代の金飾禁令集中と公私經濟における金の集散―」（『東方學』第九十二輯　一九九六年）、古林森廣「宋代の金銀細工業―金銀匠と金銀鋪―」（『明石工業專門學校研究紀要』第十五號　一九七三年）。

to select officials 科擧制. The incorporation of this vast pool of candidates into the bureaucratic system was an essential requirement in order to maintain dynastic stability.

The Kao-Cha system had advanced a solution to this problem by accelerating the internal metabolism of the bureaucracy via the expulsion of bureaucrats and implementation of personnel shifts among officials in office. The Kao-Man system, on the other hand, contained intrinsic mechanisms which served to reduce the turnover of bureaucrats—an effect far removed from its original purpose.

In the end, in the attempt to manage the bureaucracy using the Kao-Cha system, the Ming dynasty was forced to abandon the principle of 3-Kao-9-Nien, and this in turn resulted in the consolidation of the Kao-Cha system. This was an inevitable occurrence caused by the adoption of an open bureaucratic structure which could be organically integrated with the whole society.

ON AND AROUND YAN SONG 嚴嵩 AND HIS SON : WANG SHI-ZHEN 王世貞, *JIN PING MEI*, ETC.

OKI Yasushi

Yan Song (1480—1567), the powerful prime minister of the Jiaqing 嘉靖 (1522—1566), has been portrayed as a villain in various historical and literary works ever since his downfall in 1562. It was Wang Shi-zhen (1529—1593), whose father's death was caused by Yan in a power struggle in the court, who contributed greatly to the creation of this negative portrait.

Ming feng ji, a popular play criticizing Yan Song published shortly after his fall, was commonly attributed to Wang Shi-zhen. Starting in early Qing 清, Wang was also considered to be the author of *Jin ping mei* which according to some contemporary critics, was an expose of Yan's faction. Thus, in people's minds, satires of Yan Song were associated with Wang Shi-zhen. Moreover, although we cannot be certain about the

authorship of *Jin ping mei*, we know that early manuscripts of the novel circulated among Wang Shi-zhen's friends. It seems almost certain that Wang had some connection with the novel.

ON THE CONDITIONS OF FARM TENANCY IN SUZHOU 蘇州 IN THE 1920'S

NATSUI Haruki

The aim of this paper is to clarify the existing conditions, and their transformation, of farm tenancy in Suzhou in the 1920's. This paper also aims to make clear the influence of policies implemented in 1927 by the Nanjing 南京 Nationalist Government in regard to the conditions of farm tenancy.

After the Xinhai 辛亥 Revolution, an association of land holders known as Tianyehui 田業會, which played an important role in the collection of land tax, combined with the local government to create a powerful system to collect farm rents. As the income of landowners derived from farm rent increased, the amount of tax incurred with landlords was substantially less than previously. As a result, in the first half of the 1920's, the management of landowners in Suzhou was strengthened.

The Suzhou area had not experienced any disorder during the Nationalist Revolution, however, the establishment of the Nationalist Government in Nanjing in 1927 had a great impact on the conditions of farm tenancy. In adopting the policy of "reduction of farm rent by one quarter", the local government served in effect intervened to assist and incite peasants who had been exploited by powerful landowners. The local government also began to collect more money from landowners to spend for modernization. After 1927, the system for the collection of farm rents become partially inoperable, and the struggle between tenants and landlords became much more intense. At this time, the income of landowners in general was also reduced.